

色は匂へど

IRO WA NIO E DO



特集 弘法大師 書の曼荼羅世界

特別寄稿 弘法大師の書の魅力
西宮紘 竹内信夫

PHOTO SHU FUJIWARA



恩

恩という文字は

心の上に因という文字が乗っています

因はよりどころです

心の因りどころが恩です

お大師さまは四つの恩を説かれて います

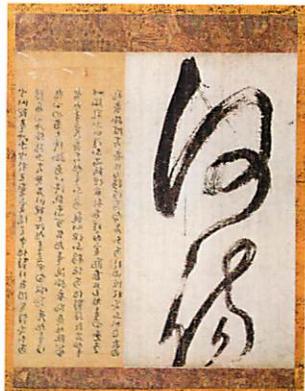
両親の恩もその一つです

恩に感謝する気持ちが

心を豊かに育んでいきます

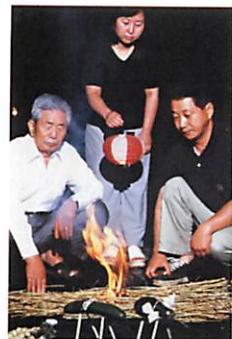
特集

書の曼荼羅世界



3

日本の心と形

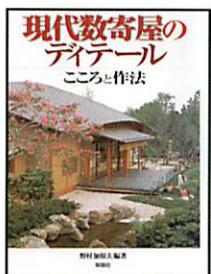


9



11

現代の道しるべ



現代数寄屋のディテール

野村加根夫
彰国社



「親って何だろう?」

チクマ秀出版社
松原哲明



新刊紹介



特別寄稿

弘法大師の書の魅力

竹内信夫

西宮紘

15

17

父母恩重經

松原哲明

チクマ秀出版社

特集

弘法大師 書の曼荼羅世界

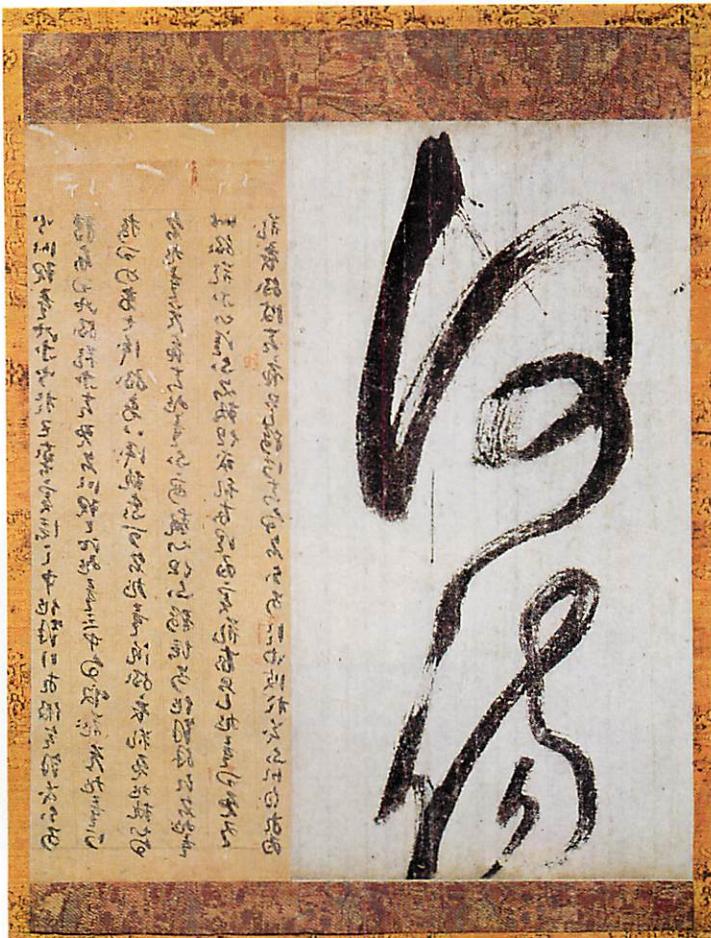
弘法大師の書ほど人々を引きつけてやまない書はない。

国宝展等で稀に出品される、灌頂記や風信帖には長蛇の列ができる。

弘法大師の書の特徴は多様性にある。書の曼荼羅世界だ。

今、弘法大師の全ての真蹟を網羅するという、

未曾有の大事業、弘法大師墨蹟聚集が全真言宗によつて進められている。



唐の催子玉の『座有銘』を弘法大師が書いたもの。戦前の大茶人、益田鈍翁はこの書を手に入れてから

「大師会」という茶会を始め、今も続けられている。

真魚から空海へ

弘法大師空海は幼名を真魚といった。幼い頃から秀でるものがあり貴者と呼ばれていた。

空海はやがて文字どおり日本史上、世界史上に名を残す尊い存在になる。

司馬遼太郎いわく

「日本の歴史上、空海だけは世界の弘法大師といえる地球的な存在。」

十八才で都の大学に上がり将来が約束されるが、宇宙の真理を求めて出家する。

空海の最初の書

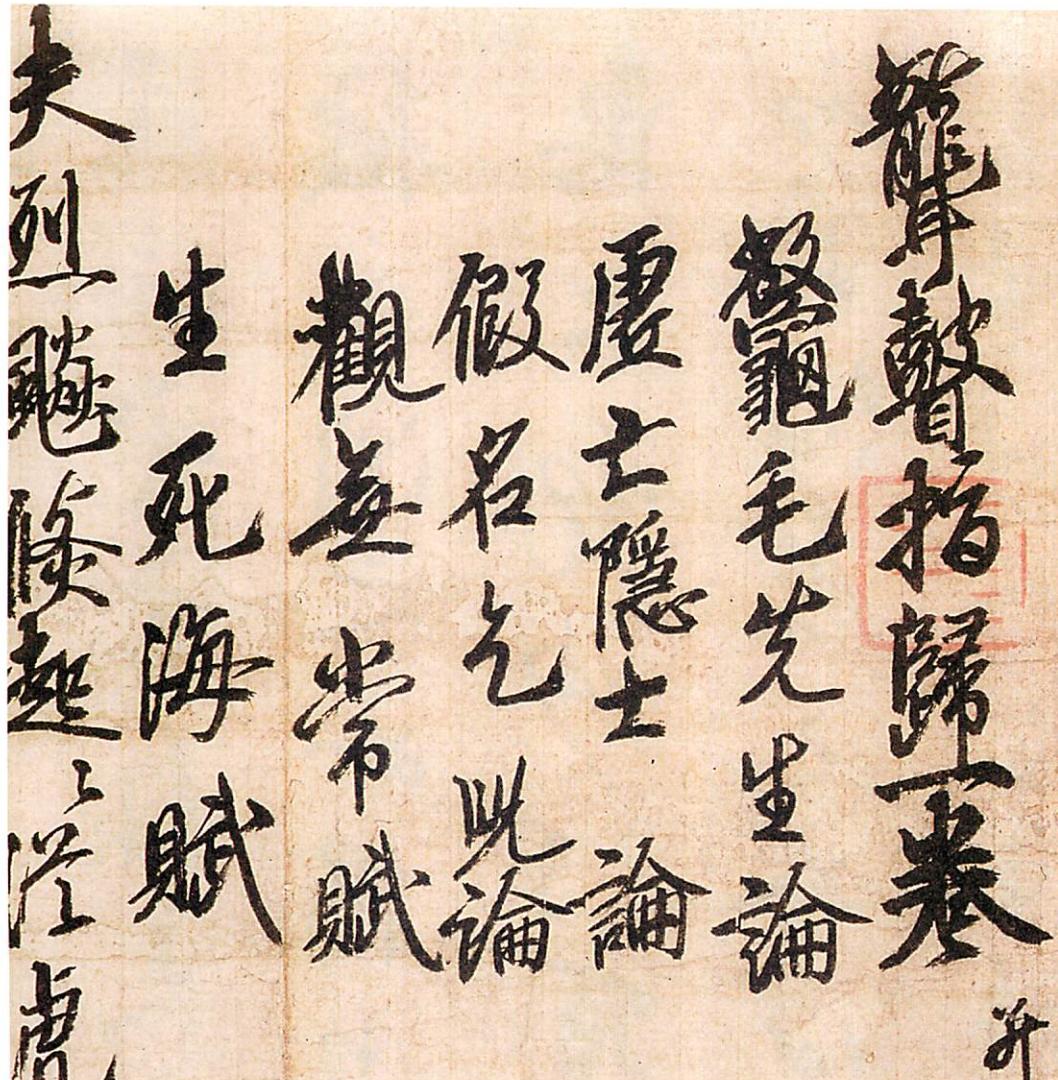
日本史上初の戯曲にして比較思想の書
『聾瞽指帰』

弱冠二十四才の時の空海の書。

仏教、儒教、道教を比較して仏教が、宇宙の真理を明らかにし人々を眞実の幸福に導く教えであることを、戯曲の形で解きあかした。

しかし他の思想を排除するのではなく「鳥が空を飛び、魚が水に住むように人もまた様々ある。その人を導く教えには深い浅いはあってもみな尊い聖人の教えである。」と異なる思想をも包み込む空海の度量の大きさは、この書からも見ることが出来る。

このすべてを包み込むような大きな思想はやがて真言密教として完成される。



風高雲盡自天崩
枝上閑之如擣雲霧篤
惠止前妙門頂戴
亦可從屬已冷供
清持归來空無推尊擬

至宝 風信帖は弘法大師から比叡山延暦寺の
伝教大師最澄にあてた手紙。ほか二通と一緒に
伝えられている。

天空から舞い降りるような軽やかで美しく
連ねられた文字は人を魅了する。

風信雲書 天より翔臨す
これを披きこれを読みするに
雲霧を掲げるがごとし

比叡山の最澄と室生山の堅慧と空海とで
ともに仏教を再興して仏の恩徳に報いんと
することが述べられている

弘法大師空海の波動は様々な形で今日に伝え
られている。

しかし書は弘法大師が自ら筆を執り筆を揮
われたもので、弘法大師の息吹を今に伝える
最も大きなもの。

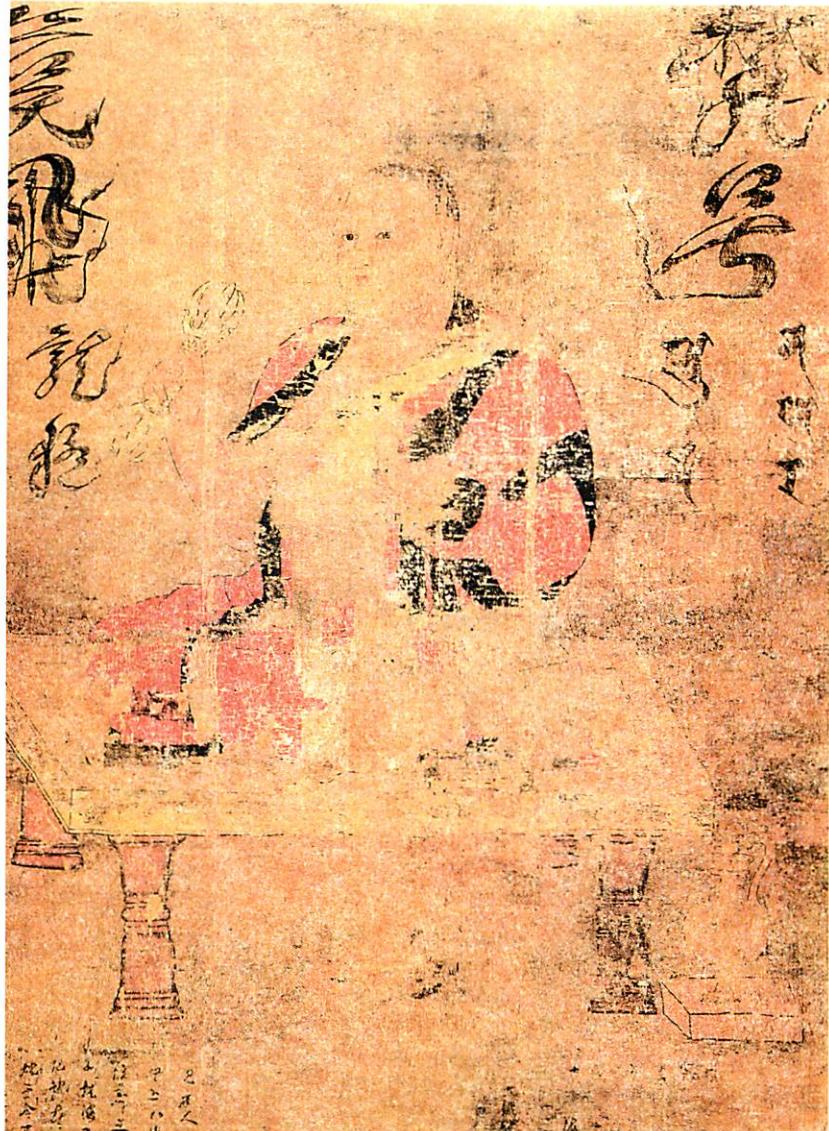
またこうして他宗の祖師にあてた手紙が
大切に手から手へ伝えられ、千二百年の時を
超えて私たちが眼にすることが出来る。

『弘法大師墨蹟聚集』が完成すれば、その素
晴らしい書聖弘法大師の書を原寸カラーで居

ながらにして手にすることが出来るようにな
る。

りゆうみょう
龍猛菩薩像

弘法大師が唐の絵師に描かせ、自ら飛白体の讚をいれたもの。



『弘法大師墨蹟聚集』とは

ぼくせきしゆうじゅう

書聖弘法大師の 国宝十二点 重要文化財八点を含む
すべての真蹟を原寸カラーで七帙二十一巻に網羅する、
空前絶後の大事業。

弘法大師が書かれた年代に従つて編集されるので、巻
を逐うごとにお大師様のご生涯が展開される。

草書、行書、楷書、隸書、飛白（ひはく）、多様な書が眼の前に
迫り、書に興味のなかつた人でもこの本によつて、書
の醍醐味を知り味わうことが出来る。

書を愛する人、書を学ぶ人には、まさに座右におくベ
き宝となり、また芸術文化を通して創造性ある仕事を
する人にとっては無限の示唆となる全集だ。

論文集では現代一流の執筆陣が担当し、弘法大師の書
の曼荼羅世界を、多角的に執筆する。



かいふもん
海賦文は万里の波頭をこえて真言密教を伝えられた、弘法大師の袈裟を納めた箱の文様
筆は復元された天平筆。弘法大師は筆の作り方も日本に伝えた。



『弘法大師墨蹟聚集』は、本巻21巻（B4折本）別巻3巻（A4）
本巻は見やすく手に取りやすい折り本で、真蹟の美しさと迫力を再現。

『弘法大師墨蹟聚集』は、1口50万円の会員制です。
出版社を通さず、オリジナル編集で原価で会員にのみ贈呈します。
配本は平成12年春から
七帙21巻と別巻とを8回に分けて配本します。

会員のお申し込みお問い合わせは

『弘法大師墨蹟聚集』刊行会事務局 電話 03-3705-7238
ファクス 03-3703-4979
郵便振替 0180-8-410133

なお お申し込みの方には振り込み用紙と会員証をお届けします。
5回と10回の分割もあります。

日本のこころと形



お盆には

身近な先祖が

帰ってきます

迎え火は道しるべ

遠くにいる子どもたちも

お盆には戻ってきます

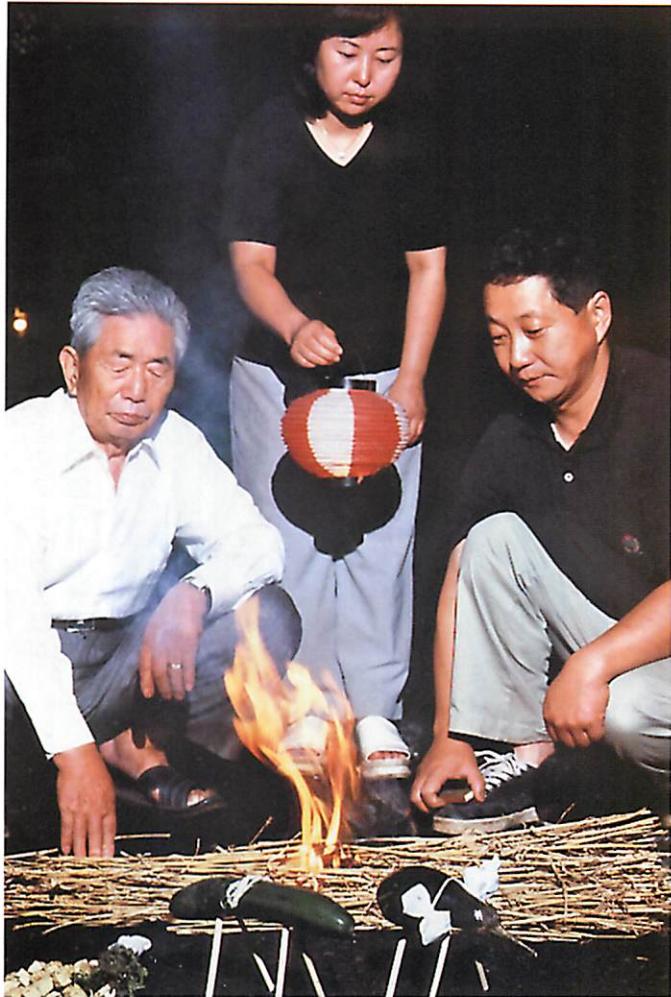
家族の絆が

過去から

未来へと

結ばれていきます

大平家の親子三代揃っての送り火 牛と馬にはお土産をつけて



美しく飾られた精霊棚

現代の道しるべ

平安時代、人は最期を迎えるとき、自分の念持仏を枕元に飾り、仏さまの指と自分の指を五色の糸で結び臨終を迎えていました。今はほとんどの人が病院のベットの上で、点滴や酸素吸入などのチューブに繋がれて、最期を迎えてています。美しい五色の糸で結縁された自分の信じる仏さまに導かれて旅立つとのとどちらが安らかな最期でしょうか。

先日、日本でも脳死による臓器移植が行われました。臓器移植にはすでに長い歴史があります。

脳死判定が行われる以前から、腎臓、角膜、骨髄、肝臓、そして血液も臓器に含まれば、臓器移植は日常化しています。

ではなぜ脳死という新しい死の定義が必要なのでしょうか。

心臓を移植するためにはまだ動いている心臓が必要です。しかし今の死の定義は心臓が止まることですか、移植は不可能です。そこで死の定義を変え、心臓が生きているうちに死を判定することが、脳死判定で



す。つまり脳が死んだと思われる時を人の死と決めようということです。脳死と判定されてもその人の心臓は動いていて息もあり体にも暖かい血液が流れている状態でも、それを死と認めようとすることが脳死判定です。

つまり脳死判定は移植のためにのみ必要な死の基準で、多くの問題をはらんでいます。

しかし一番の問題は、現代人の多くが死についてのしつかりした考え方がないことです。

その時になつて慌てて、どうしようかといつても、冷静な判断はできないでしょう。

私は脳死にはまつたく反対ですが、安楽死は許されると思っています。尊厳死はとても良いと思います。

脳死の他に尊厳死や安楽死、心臓死。死にそんなたくさん種類がある現代です。時代が進むともう少し種類が増えそうですが。大切なことは一人一人がどんな最期を迎えたいか、それをしっかりと考える時代に入つたということです。

勿論、戒名の問題もお墓の問題も、その時を迎える前にしっかりと考えておく必要があります。

脳死については立花隆氏が『脳死臨調批判』など多くの研究を著しているので、ぜひお読み下さい。

たんぽぽは花が終わると、綿毛に種をのせて飛び立ち、新たな場所で新しい花をさせます。



花が咲いているときに手折ると綿毛はできず、新しい花も咲きません。

弘法大師の書の魅力

竹内信夫

いつ、どこの展覧会であつたか既に記憶は茫漠としているのですが、「風信帖」の実物を初めて拝見した時の感動は今でも鮮やかに記憶に刻まれています。

大師が書の達人であることは今さら言うまでありません。また大師の書についての専門的な論評や研究も数多く発表されています。しかし、それらは「書家」の実作的立場や「書道史」の研究者の立場からのがほとんどです。一方、私は大師の書をこよなく愛する者ですが、しかし、書の専門的なことは何もわかりませんし、知りま

せん。
それでも、大師の書についての文章を読む度に、私はいつも同じ不満を感じないではいられません。
それというのも、「風信帖」と初めて対面した時の私の感動はそのようなわゆる「書」の専門的観点からはまったく別のところから涌きあがってきたものであつたよううに思うからです。そこに大師の書がもつていていた芸術性が働いていなかつたとは言いません。今からその時のこと振り返つてみても、間然するところ無き芸術性が私の眼前にあつたことは間違いない事実ではあります。しかし、私を圧倒したのは、それよりももっと強烈な何か、少し言葉は難しくなりますが、「現前性」とでも言うべきものでした。



いでしょうか。

弘法大師空海という存在に関心を抱き始めた頃のことであつたことは確かなのですが、遠い記憶はもはや前後の関連を失つてその位置を定め難くなっています。

ただ、「風信雲書、自天翔臨」という文字で始まり、流れでは留まり、留まつては流れ、最後の「釋空海状上、九月十一日、東嶺金蘭法前謹空」で終わる墨の流れが、その時の強い印象とともに、今でも記憶の虚空にくつき

ます。今からその時のこと振り返つてみても、間然するところ無き芸術性が私の眼前にあつたことは間違いない事実ではあります。しかし、私を圧倒したのは、それよりももっと強烈な何か、少し言葉は難しくなりますが、「現前性」とでも言うべきものでした。

大師の真跡とされるものが多く後世まで大切に伝承されてきています。それは、私に言わせれば、大師の書の「芸術性」もさることながら、やはりこの「現前性」が大きく働いていたからではないかということになります。大師の書かれたものであるが故に、大師その人に接するように尊重されたのです。

今まで伝承されている大師の真跡には

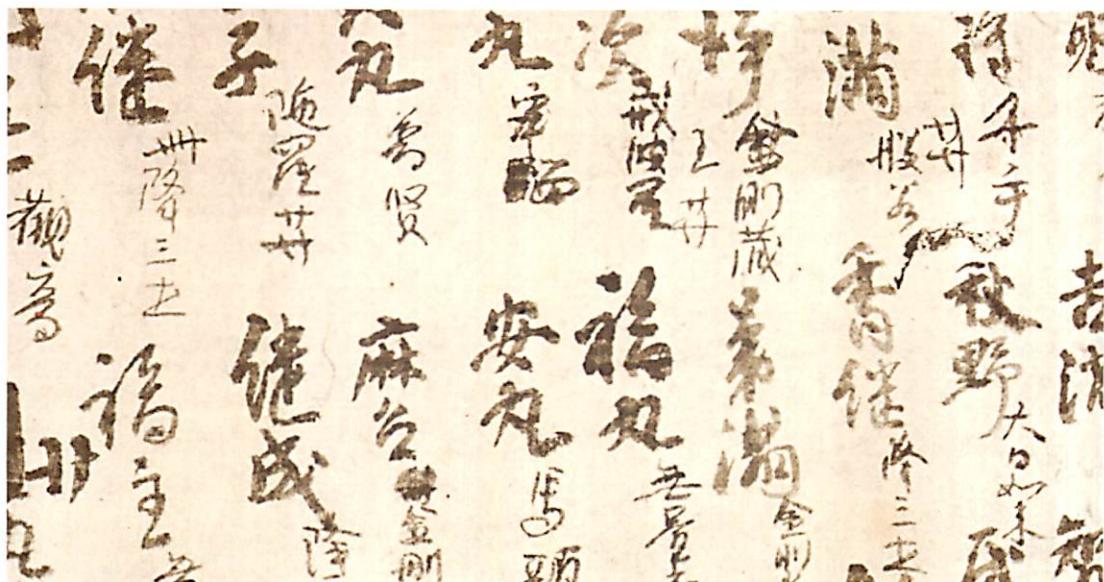
一つの大きな特徴があると思います。それは、春名好重さんなども指摘しておられることなのですが、それらの伝存の書がその時その時に応じて書かれたものであり、従つてまたその都度多彩に変化するということです。一定のスタイルがないとは言えませんが、しかしそれは芸術家のそれではありません。もう少し自由で闊達な、そう、その人の持つ風韻とでもいうべきものが大師の書にはいつでも感じられます。

大師の書の中で、私の好きなものを上げれば、第一には勿論「風信帖」、「忽披帖」、「忽惠帖」の三通の伝教大師宛の尺牘ですが、次には高雄山寺での灌頂を記録した「灌頂歴名」、「大日經開題」(「開題」と言われていますが、実際には「大日經疏」からの抜書帖です)、そして留学先の長安で大師が密教受学の際に書かれた「三十帖策子」、特に大師真筆が確実な第二十六帖、第二十七帖などです。この「三十帖策子」には漢字ばかりではなく、大師の梵字の書も含まれていて大変興味深く、また貴重なものです。

どれもがその場の必要に応じて書かれたものばかりです。手紙であつたり、記録であつたり、抜書であつたり、陀羅尼に関する

る覚書であつたりするのですが、決して「書のための書」ではありません。この点にこそ、大師の書の大きな魅力が秘められているのだと思います。その場その場で具体的な目的をもつて書かれたものであるにも拘わらず、いやむしろそうであるからこそ、これらの書からは今も尽きぬ魅力、それを書き残したその人の人間的魅力が発散されています。

これを言い換えれば、これらの書にこそ、大師その人がありありと現前しているということではないでしょうか。大師と対面する方法は様々にあるでしょうが、大師の書にその人と向かい合うがごとく向かい合うということともその方法の一つに数えてよいと思います。一つであるというよりも、最も重要なものとして、大師の書と向かい合うことはもつともっと大事にされよいのではないかと思います。

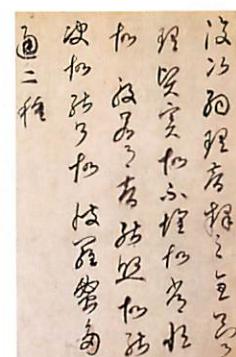


国宝 灌頂歴名 極めて早い筆の運びが大きな波動を生む。
また小文字で書かれた得仓名は仮名の出現を予感させる。

弘法大師の書の魅力

精神文化史 研究家 西宮 紘

しかし、お大師さまの魅力の一つにこの多様性があるということも事実である。



金剛般若経開題

二十年ほど前に、私はお大師さまの書に熱中した時期がある。

最初に手を出したのは「金剛般若経開題」である。何度も何度も何度も書写しているうちに、一種清冽な官能を覚えるようになつていて。次に手を出したのは「三十帖策子」である。最初はその細字そのままを臨書していたのだが、やがて、それを拡大して半切に縦二行二十五、六字で書するようになった。その時に気がついたことは、策子の字は、拡大すると下手は下手なりに物凄い迫力を見せるということである。なんという天才的能力の持ち主であられた師さまが、他人の書をあつといふ跡であるのにそうでないとか、真跡ではないにお大師さまの書であるとか、△伝空海△とされる書作品は実に多いのである。一つには、お大師さまが、自分のものにされて再現し得るとても多くの問題である。なんどいふことがあるが、いずれにせよ、この多様性という問題は、お大師さまの書に触れる者にとってはやつかいな問題である。

二十年ほど前に、私はお大師さまの書に熱中した時期がある。最初に手を出したのは「金剛般若経開題」である。何度も何度も書写しているうちに、一

要するに、この時期に私は、お大師さまに清冽な官能性と物凄い人間的な迫力と、がつしりと構築されているある本質的な体系的存在性を感じ取っていたのである。感受性と運動しているのだ。しかも、それらが豊かで鋭敏な感受性と運動していたのがそこにはある。これは一筋縄ではいかない代物であった。普通の書道という観念では捉えられない何かがそこにある。一見自然にさらさらと書されてあるかのようだが、その背後に綿密にしかも無意識に働いている造形意識のがつしりとした存在性を感じたのである。それが解き明かされねばこれ以上進まない、という状況に立ち至つたのである。

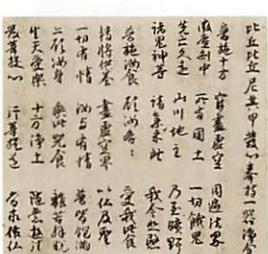
さあ、私はこのように、この時代の大師さまに清冽な官能性と物凄い人間的な迫力と、がつしりと構築されているある本質的な体系的存在性を感じ取っていたのである。感受性と運動しているのだ。しかも、それらが豊かで鋭敏な感受性と運動していたのだ。

お大師さまの書で、その魅力を最も發揮しているのは「灌頂記」である。堂々としてさまざまに変化する人名と、すつきりとしてしなやかな得仮名の意外に強靱な線質である。同じ人間が書いたものとは考えられないほどである。得仮名は後に出現する女手、すなわち仮名書の出現を暗示している。同時に、また、このような線質で表出できる力量があればこそ、「忽恵帖」のような美麗な書を書くことができるであろう。「忽恵帖」は御消息三通の中で最も早く書かれたものと私は考えているのだが、中國的感性が前面に出た迫力のある雄品である。「三十帖策子」の細字を拡大したときの迫力が再度王羲之の洗礼を受けて現れたような書である。

このように、お大師様の書が書としてもつとも充実しておられる時期の御消息三通と「灌頂記」でさえ、それぞれに個性の違う存在感をもつて我々の前に現れているという事実があるのである。

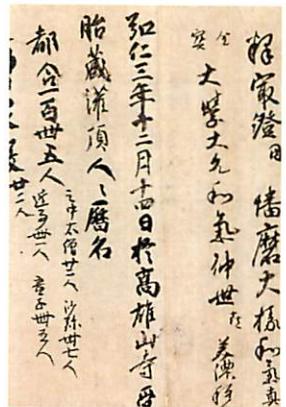
昔から書は人なりと言われている。だから、お大師さまの書の魅力というのは、結局はお大師さまの魅力ということになる。しかし、困ったことに、お大師さまの書はあまりにも多様である。小野道風でさえ、その多様性を批判するくらいである。「古今著聞集」によれば、嵯峨天皇は、在唐時代のお大師さまの書をお大師さまの書と認めることができなかつたという。それほどお大師さまの書は変化するのである。

有名な「風信帖」、そしてかの有名な「風信帖」へと進んだので憶している。



三十帖策子

このように、お大師様の書が書としてもつとも充実しておられる時期の御消息三通と「灌頂記」でさえ、それぞれに個性の違う存在感をもつて我々の前に現れているという事実があるのである。



灌頂記

我々凡人はどうかすると変化を避けるか嫌う傾向がある。ある作品が評判になつたとすると、その作品を創つた人物がそれとは違つた作風の作品を創ると非難されるということがよくある。それは先に創つた作品こそその人らしい作品であると決めかかってしまうからであろ

御消息三通がたまたま、つなげられてゐるからこそ、三通總てがお大師さまの書であると我々はつい信じてしまうのだが、ばらばらに切り離されていたながら、こんなに個性の違う書を同一人物の書と言えるだろうか。字體が同じということはあるにしても、書風はまったく違つてゐるのである。

学ぶとき、一種のとまどいを覚えることになる。それが本当のお大師さまなのだろうかと。また逆に、お大師さまの書を学んで成功した人がこの世にいるのだろうか、という疑問さえ覚える。書を学ぶにはその書を書いた古人の心になぞらえるべきで、その書体に似ているからといつて巧みであるとはいえない、とお大師さまは言われているが、一方で、その心は今現に對象としている対象物に従つて移るという意味のことも言われている。となれば、お大師さまの書はそれぞれの瞬間に動いているのであり、そうなればますますお大師さまという存在がわからなくなる。

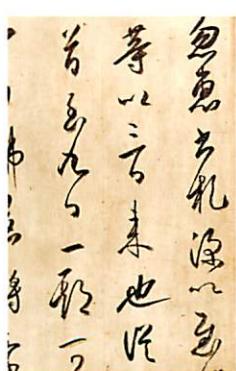
どうやら、変化しつつかつ不变のもの、ということに秘密があるようである。易の考え方で言えば不易流行ということであるが、お大師さまの場合は、真言密教と密接な関係にあるものと思われる。つまり、お大師

さまの書の魅力は、真言密教に根差したものであると考えられるのである。

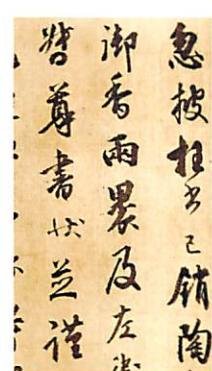
元々、「釋尊指帰」からも分かるように、お大師さまの資質の中に変化を好まれるところがあることがあるが、そこには不变性に相当する何かを感じられない。幼少の時からの修練の結果としての形としての不变性だけである。変化を好まれるということは、本質的にお大師さまが創造者としての資質を持つておられるということであり、それをがつしりとした体系性ないし構造性として不变のものとして支えているのが真言密教であることができる。

お大師さまの多様性というのは、境（対象）によつて変化する心の多様性であり、瞬間々々の創造の結果であり、その創造を通して不動の遍照金剛一大日如來としての働きが現れているのである。そうであればこそ、お大師さまの書はそれぞれの個性的書を集めた一種の書曼荼羅

である。その魅力はまさに書曼荼羅の汲めども尽きない宇宙的多様性にこそあるといえよう。



忽惠帖



忽披帖



風信帖

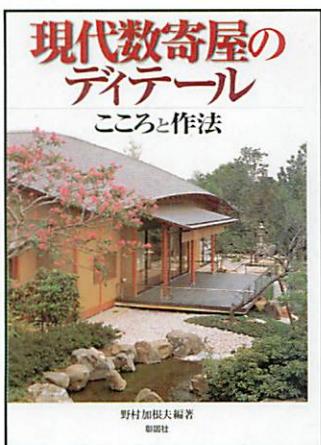
ふぱおんじゅうきょう

父母恩重経

チクマ秀版社 松原哲明

親子の問題は社会の基本です。
親の恩ということが言われない現代ですが、恩といふことがわかれ、多くの問題が解決します。

恩に感謝する気持ちが幸福のバロメーターでしょ。どんなに豊かな生活をしていても感謝の気持ちがあれば、幸福にはなりませ



現代数寄屋のディテール

野村加根夫編著

彰国社

伝統は受け継ぐだけでは形骸化して生命を失います。歌舞伎でも宗教でも。

建築では吉田五十八氏が数寄屋建築を見事に甦らせました。

この本は吉田門下の野村加根夫氏の編著でサブタイトルは『ここと作法』現代数寄屋を学べる本です。

今号はいよいよ刊行が迫った、

『弘法大師墨蹟聚集』書の曼荼羅世界を特集しました。

西宮先生、竹内先生にも特別寄稿をいただき、充実した内容になっています。

『弘法大師墨蹟聚集』は本当に素晴らしい全集ですのでぜひお申し込み下さい。

予告した星と真言密教は次号で特集します。

今年は桜が長く楽しめ、こぶしが美しい花を沢山つけましたが、こんな年は夏が暑くなると言います。オゾン層の破壊もあり、紫外線が年々強くなります。オーストラリアの子供達はほとんどに帽子とサングラスは必需品です。プールにもテントを張つて直射日光を防いでいます。

環境ホルモン等は人体の弱い細胞から破壊していきます。角膜は露出しているだけに、サングラスで紫外線を防ぐのは日本でも常識になりそうです。ダイオキシン問題は原因となる塩化化合物の製造をまず止めるべきで

E-mail ryuju835@ra2.so-net.ne.jp

www02.so-net.or.jp/~kukai168/

*先日、大林組の本社に完成した

茶室開きに招かれました。

大林剛郎副会長のお点前は二度目ですが、男らしい締まつたお点前で、お茶は男にこそふさわしいと思います。

新社屋も素晴らしい、近代美術館の中にいるようでした。

選び抜かれた現代の芸術家の作品が新社屋に融合していて、しかも品格を感じます。

経営と芸術の融合から新しい文化が兆すような気がします。

かつてホンダの名経営者だった藤沢武夫氏は

「経営と芸術は一緒ですよ。芸術のわからない奴に経営なんてできません。会社なんか行かな

くともね、車がわからなくともね。僕なんか免許も持っていないんですよ。」とよく言われていました。いつも着流しで、ワーゲナーの音楽について、ミロや

クレーの絵について語る姿は、経営者と言うよりは数寄者でしたが、経済と芸術が融合する時代のさきがけだったような人でした。

*連休にイスタンブールに行く予定

がありました。残念ながらケルド問題でキャンセルしました。

昔ケルド人の学生とボーランドから亡命してきたユダヤ人とイランの学生とアメリカ人の学生とで

集まる機会がありました。まだイランとアメリカが仲の良かった

パーレビ国王の時代です。クルド人はイラン北西からトルコにかけて拡がりを持ち、第二次

大戦後ケルド共和国が正式に認められましたが、イラン、トルコの狭間で分割された状態で今日にきています。かつてボーランドがナチスに割譲された状況にもなっています。

クルド人の学生はいかに不當に

故国が占領されているかを訴えました。いつも着流しで、ワーゲナーの音楽について、ミロや

ボーランドから亡命してきたユダヤの学生は、ユダヤ人が国がないことの悲劇を二千年も経験し、

また国があつても独立と自由がないことは現実です。そしてチ

世界の窓が開かれる弱肉強食のベットは未だに中国の占領下であります。ケルド人は軍人に、アメリカ人は政治家にボーランドのユダヤ人は映画監督になると言つ

めます。それから議論は植民地のことソ連とアメリカどちらが先に崩壊するか、ユダヤとアラブは大戦前まで仲が良かったこと。大戦の時、イギリスとフランスがユダヤとアラブから軍事費を調達し、その見返りに中東に国家の樹立を約束したこと。その約束を反故にされそうになります。かつてイスラエルがアラブに圧力をかけてイスラエルがようやく建国されたことなど延々と続きました。

映画といえば先日、等々力不動尊で映画のロケの申し込みがありました。映画のロケでは過去にトラブルが多く二十年以上ありましたが、映画監督の土井智

ギリスとフランスがユダヤとアラブから軍事費を調達し、その見返りに中東に国家の樹立を約束したこと。その約束を反故にされそうになります。かつてイスラエルがアラブに圧力をかけてイスラエルがようやく建国されたことなど延々と続きました。

映画といえども打ち合わせに、電話でもすむ打ち合わせに、

徹夜明けの熱海から駆けつけたり、シナリオを届けにこられた

最後にアメリカの学生が、国際ルールは強国が力によって作る。でもフランスは外交がうまくて、

しかもエネルギーも食料も自給率

が90%を超えるからいつも強気なんだ。将来はフランスに似た中國がソ連以上の脅威になる。

もう二十年も前の話でしたがソ連が崩壊し中国が急速に力を付けていました。



PHOTO SHU FUJIWARA

次回発行は9月1日予定

特集 星と真言密教

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA Special Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA
Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIN S.H.C

〒158-0082 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第十一号 平成十一年文月一日発行